

国の家庭でクリスマスケーキを食べるといった具合で、信仰というよりは生活習慣として、複数の宗教を巧みに使い分けている。³⁸

この一般書が認めるように、確かに日本人は、原理・原則によって生きる民族ではなく、習俗・習慣によって生きる民族である。思想やイデオロギーによって日常生活を犠牲にしていくことよりも、まわりとの和を尊び、伝統を重んじ、静かに生きることを好み、闘いよりは協調を好む。このことのゆえに、福音派キリスト教の信仰は日本の土壤に根付きにくいのであろう。

なぜならば、福音派の宣教は、個人的な決断・決心によって公に自分の意志を告白し、神の前に責任を明らかにしていくという個人主義的傾向を持つているし、信仰生活においても、聖書を学び、その真理に自らを従わせていくという原理・原則に立った人生を求める傾向があるからである。このことは裏返せば、福音派クリスチャンが、キリスト教信仰や習俗や習慣のレベルでとらえられることに反発してきたと言えよう。信仰とは単なる習慣としてではなく、常に自覚的・主体的に自らの決断によって、この世と調子を合わせずに生きて行くことである」との視点から、そのような姿勢が保たれてきたのである。

このこと自体は間違っていない。ただ、筆者が提言したいのは、それだけがキリスト教徒の選択肢ではないのではないかとということである。日本人が習俗に従いやすいということであれば、キリスト教を習俗化していくことを考えてもいいのではないだろうか。クリスマスがその代表的な例である。自覚的にクリスマスを祝う人がいる一方、単なる習俗だからというので祝う人がいてもいいのではないか。習俗・習慣というものの持つ力(形あるものの力)を用いることを考えてもいいのではないかと思うのである。

神社参拝問題が議論されるとき必ず出てくる政府見解の中の言葉は、「神社参拝は宗教行為ではなく国民的習慣である」という言い方である。キリスト教の側がどれほど口角泡を飛ばして「神社参拝は明らかに宗教行為だ」と言っても、彼らの発言は変わらないであろう。それほど、習俗・習慣という言い方に日本人は弱いのである。いや、日本人ばかりでなく、人間がみな文化的存在である以上、習慣となっている儀式・行事には大きな影響を受けるのである。それだからこそ、神は旧約の民に、異邦人の宗教儀式を採用してはならないことを命じたのではないだろうか。そしてただ禁止されるだけでなく、彼らが採用すべき儀式を定められたのではないだろうか。

習俗や習慣に関して、もう一つ着目すべき事柄がある。それは通過儀礼に対する取り組みである。初代教会の宣教を見ると、彼らの宣教とはローマの異教的通過儀礼に生きて来た人々をキリスト教の通過儀礼に生きる人々へと転換した業であると位置づけることができる。³⁹ すなわち伝道とは、あるとき「イエス様を信じます」と告白せる業であるという以上に、その人の生涯を転換させる業であるから、それまで慣れ親しんだ習俗・習慣からの脱皮と、新しく提示された習俗・習慣への適応を意味するものである。この点を考えれば、従来福音派は「新しい習俗・習慣」を提示する努力に欠けていたと言えるのではないだろうか。

一般的日本人ならば、生まれてから死ぬまで異教の宗教儀式と否応なく係わっている。お宮参り、七・五・三、ひな祭り／端午の節句、成人式、結婚式、葬儀など、キリスト教の側にこれらに換わるものがないなら、クリスチャンになることはこれらの習慣によって得ていた人生の節目の祝福を失わせることになるばかりか、クリスチャンではない家族の他の者からの好意による申し出に、否定的な答えしか出せなくなる。すなわち、「お宅のーちゃんの七・五・三にお祝いをしたいが、どこでやるの?」と言われても、「うちはクリスチャンだからやらない」としか答えられないのである。その時も、「教会でお祝いするから来てください」と言えるとするれば、そこには大きな違いが生

じるのではあるまいか。

以上の点に加えて、筆者は日本における「形あるもの」の持つ重要性を考えると、どうしても中世のキリシタンたちの信仰を支えたものに思いをはせないわけにはいかない。

周知のごとく、日本への最初のキリスト教の渡来はザビエルによる宣教であった。十六世紀という戦国の末期に当たって、様々な要素が絡み合っていることではあるが、イエズス会の宣教はめざましい成果を生み、多くのキリシタンが生まれた。そして、その後の厳しい迫害の中、棄教するよりも殉教の道を選んでいた人が多くいた。

彼らの信仰を支えたものは何だったのだろうか。宣教師がことごとく国外追放にあう中で、ローマ教会との関係を一切断たれ、教職の指導もなく、聖書もなかった彼らの、殉教までする信仰を支えたものは何であったか。それはリチュアルと信仰共同体の存在であった。⁴⁰ すなわち、激しい迫害によって多くの者が脱落していく中、住人のほとんどがクリスチャンであるというような村では、秘密の組織が成立していた。教会暦を維持する帳方（ちようかた・村の長がなる）、新生児に洗礼を授ける水方（みずかた・各部落ごといた）、教方（おしえかた・祈禱文や教理を教える）、聞方（ききかた・主日や祭日に関すること、断食や小齋等について家々に連絡して回る）などの役割分担の存在である。そして、お互いに励まし合うだけでなく、これらの一人一人が忠実に役割を果たすことにより、隠れキリシタンの間では驚くほどしっかりとした教理および祈禱文の伝承が実践されていたのである。

司祭のいない中でのことであるので、彼らは秘跡の恵みにあずかることはできなかったが、これらの組織を通じて伝承された祈禱日課（オラショ）、懺悔（こんちりさん・Confession）などのリタジー、そしてお互いに隠し合いつながり保持したロザリオやマリヤ観音像などのシンボルが彼らを支えたのである。ジェネスはこのような村全体がキリシタンであるような村からのみ、十八世紀後半から明治初期に、隠れキリシタンが発見されたと記している。

このような、日本人の宗教心における「形あるもの」の持つ力の大きさを考えるとき、前述の信仰のバランスの問題と相俟って、福音派でも再検討をうながされてしかるべき時期に来ているのではないかと筆者は思うのである。この形あるものは、礼拝においては十九世紀以来フランスのカトリック教会で始まった「典礼運動」を通して声高に叫ばれているが、何も形式を導入すればよいということではない。もつと根本的に、形あるものへの認識が深まり、霊と物質を分離する発想がなくならないかぎり、形だけ導入しても死せる形式主義に流れるか、偶像礼拝の危険に陥るだけであろう。筆者はまず第一段階として、福音派の中に「形あるもの」への再評価が始められることを願いたい。そしてそのきつかけとして、礼拝全体の性急な改革よりも、キリスト教式通過儀礼の開拓や、聖餐式の回数を増やすことなど、牧会的裁量によって可能な範囲の事柄から実践に移していくこと、そして本稿で指摘したような片寄りが教会内に生じていないかどうかの検討を始めることを提言したい。

注

(1) 日本語においては、*imago* (*ei-kaw* のラテン語訳、英語の *image*) が「かたち」「似姿」「像」などと様々に訳されるため、誤解が生じやすい。「新改訳」では「かたち」(ロマ一：二三、八：二九、一コリ一五：四九、二コリ三：一八、四：四、コロ一：一五、三：一〇)、「実物」(ヘブ一〇：一)、「似姿」(二コリ一：七)、「肖像」(マク三：二〇、マル二：一六、ルカ二〇：二四)、「像」(黙三三：一四、一五、一四：九、一一、一五：二、一六：二、一九：二〇、二〇：四)と訳されているが、「網要」では「形」が用いられているため、本稿では引用や議論における不必要な混乱を避けるために「形」に統一することとする。

(2) カルヴァンの画像使用に対する全面否定は、以下の題が付された「網要」の各節においてうかがわれる。「神を形あるものと想像することは、拒絶される」(I.xi.7)、「神は御声によって知られ、形によっては知られたまわらない」(I.xi.8)、「像を立てると、ただちに偶像礼拝がとどまらう」(I.xi.9)。

- (3) 歴史的には、創一・二六におけるツエレムとデムートの解釈について論争があり、*et kava* は前者のツエレムの訳語であるので、後者の訳語である *hōlōatōr* についても触れるのが論理的には必要であろうが、プロテスタントではおむねこの両者ツエレムとデムートは同義語であるという理解が一般的であるので筆者は *et kava* のみを使用することとする。カルヴァンもこれらが同義語であるとの立場をとっている。『綱要』I.xviii においてカルヴァンはその理由を二つ上げている。第1は、一つのことを二度説明するのがヘブル人の慣用であったこと。第2には、ことから自体を見ると、これは人が神に「似て」いるから「神の形」といわれたものだということが、少しのあいまいさもとどめないほど明らかであるから、と。
- (4) 筆者がここで念頭においているのは東方教会の人々のことである。彼らにおいては画像は礼拝される (*adored*) ものではなく、敬意を表される (*venerated*) べきものである。彼らは神に対する礼拝 (*latreia*) と、画像を通してのキリストや聖人に対する表敬 (*proskynesis*) とは「きりと区別」している。
- (5) 形あるものに対して適切な対応ができる人の資質としてどのようなものが求められるかについては、筆者には一つの仮説がある。それはまだ体系的に展開できるものとなっていないので、本文で述べることができないが、注として要点を記せば、神の御言葉に継続的に養われている人にとって、物画偶像になる可能性は極めて低い。御言葉に養われていない人が、物だけを保持するとき、それが偶像になる可能性が高いということである。この、御言葉と形あるものの並存ということとは、歴史的な教会の礼拝が二重構造 (*Service of the Word and Service of the Table*) であったから、また礼典の制定には御言葉の裏付けが必要であること、神の言葉が読まれなくなった時代以来、偶像礼拝がはびこっていたヒゼキヤの時代の実例があることなどから、例をとることができ。従って、物を置くかどうかや、物をどう扱うかということではなく、人の霊性が御言葉によってどのように養われているかに力点を置いた牧会指導が適切であろうと思う。
- (6) 本稿の引用は全て、渡辺信夫訳、『カルヴァン キリスト教綱要』新教出版社、一九八二年よりのものである。
- (7) 『綱要』I.xi.57 は、「教皇グレゴリウスの誤りは聖書と教父たちによって論駁される」という題で総括されている。カルヴァンがグレゴリウスの名をあげているのは、彼が「像は無字なる者のための書物である」と言ったことによる。(I.xi.5)
- (8) カルヴァンの画像礼拝攻撃は、彼自身の西方教会の実践と直面した経験に基づくものであるが、『綱要』の中では、彼は非難の矛先をローマ・カトリックに対してだけでなく、東方教会の神学や実践にまで広げている (I.xi.4, 14-16)。すなわち彼は、「おもに一五四九年にシャルルマーニュの名の下に発行された *Libri Carolini* に基づいて東方教会への非難を展開しているのであるが、この
- 書が第二ニカヤ會議の文書のおさまつた訳のために、東方神学を誤解したうえに成り立っていることに留意しなければならぬ。すなわち、*latreia* と *proskynesis* をともにラテン語の *adoratio* の同義語と解釈したラビエリ『*Libri Carolini*』の著者は、ギリシヤ人たちは偶像礼拝を是認してゐるとして長々と非難したことを」(Anthony Ugolini, "The Libri Carolini: Antecedents of Reformation Iconoclasm", *Iconoclasm vs. Art and Drama*, Clifford Davidson ed., Kalamazoo, Medieval Institute Publications, 1988, p.12)
- 自分たちと違う社会に属する人々の考え方について学ぼうとするとき大切なことは、まずその人たちが自らの考え方をどのような用語で定義し、どのような世界観を持っているかということを知り研究することである。ともすると我々は、他者の考え方を他者の用語や世界観で考えるより先に、自分たちにとつてもっともしっくりくる用語や世界観を相手に投影し、押しつけるものである。筆者はこの傾向をカルヴァンの中に見いたすのである。すなわち、自らのローマ・カトリック教会との接触によって染いた観念を、誤訳に基づく *Libri Carolini* によって擁護させながら、東方教会の神学に押しつけたと見られるのである。
- (9) ド・トマスは、教会の機能における魔術的側面は、しばしばテホーショナルな側面と区別困難であった。と語っている。(Carlos M. N. Fire, *War Against the Idols: The Reformation of Worship from Erasmus to Calvin*, New York, Cambridge University Press, 1989, p.11, n.10)
- (10) 筆者のこの種の叙述は Fire の前掲書、八一七頁に拠るものである。
- (11) カトリックの持つ画像礼拝における偶像礼拝の危険性は、画像や彫像自体の持つ特徴によるものであるとも言える。西側においては、画像や彫像があまりにも写実的であったため、木や石やガラスで表されたものが非常にリアルなために、画像等がそれ自体で生命を持ち、奇跡を行ない、独立した礼拝の対象となりうるものであった。(Fire 前掲書、一四頁)
- (12) ある聖人の名前は、その聖人が治すと信じられていた病気の名前と結び付けられた。聖アンタニー炎症 (St. Anthony's fire) として知られる皮膚病、聖マウアーの悪魔 (St. Maur's evil) と名付けられた通風、聖フィアクルス (St. Fiacrus) 潰瘍、聖ダミアン (St. Damian) 伝染病、聖ピウス (St. Pius) 中風などが、その例である。(Fire 前掲書、一二頁、注10)
- (13) Fire 前掲書、一三頁。
- (14) Fire 前掲書、一九七―一九八頁。
- (15) 以下のカルヴァンの言葉は霊を聖とし肉を悪とするギリシヤ的二元論をうかがわせる。

さらに、「人間が「たましい」に「肉体」とから成っている」ということは、議論の余地がない。また、キリストがその霊を父にゆだね（ルカ二二：四六）、ステパノがその霊をキリストにゆだねたとき（使徒七：五九）、これは「たましい」が肉の牢獄から解かれたとき、神がその不朽の保護者になりたもう、という意味にはかならない。（I, xv, 2）

(16) 以下の引用は、人間における神の像（形）のカルヴァンによる解釈を示すものである。
外的な人間においても神の栄光は照り輝くけれども、かれの「形」の据えられる場所が「たましい」（二霊：筆者補足）にあることは、疑う余地がないからである。（I, xv, 3）
クーパーは他の引用を紹介している。

霊以外に神の形を担いえるものはない。なぜなら神は霊だからである。この点で形は肉より区別されるのである。（Calvin's Tracts, III, p. 423, 424 441）David J. C. Cooper による引用。Cooper, "The Theology of Image in Eastern Orthodoxy and John Calvin," *Scottish Journal of Theology*, vol. 35, 1982, p. 219-241

(17) カルヴァンによれば救いとは以下のことの意味する。①「いのちを与える霊」（新改訳では「生かす御霊」）をキリストより受けること。この「いのちを与える霊」はアダムを「生きたもの」としたものと対比される（イコリ一五：四五）。②キリストによって「神の形」に変えられること。③創造者の「形」にしたがって更新されること（コロ三：一〇）。④神にかなたによって創造された新しい人を着ること（エペ四：二四）。ヤコブの更新は知性（エペ四：二〇、コロ三：一〇）と義と純粋を（エペ四：二四）において成されるものである。（I, xi, 4）

(18) 神はわれわれを御自身に對する正しい礼拝——すなわち、靈的であり、かれ自らによって制定された礼拝——へと教育したもうのである。（II, viii, 17）

(19) *Enne* もカルヴァンのローマ・カトリック攻撃は、神を飼ひ慣らしその栄光を奪い去ろうとする人間的企み行為に對する告発であると表現している。（前掲書、一九七—一九八頁）

(20) この点は、主の祈りの「天にまします」の説明の中にも見られる。（III, xx, 40）
カルヴァンは使徒一七：二九を引用し、次のように言う。

(21) およそ神にかなたによって像を立てたり、画をかいたりすることは、まさに神の尊厳をはずかしたものであるとして、端的に神の不快を招くことである。（I, xi, 2）

また、次のようにも言う。

さらに注意すべきは、聖書のいたるところに、このような言い方で、もろもろの迷信は「人の手のわざ」であって、神の権威をもたない、ときめつけていることである（イザ二：八、三二：七、五七：一〇、ホセ一四：四、シカ五：一三）。これによって、人間が自分自身から考え出したいっさいの礼拝は、いまわしいものなどということが、確定するであろう。（I, xi, 4）

(22) この命令（第二戒）はふたつの部分からなっている。第一はわれわれの出まかせな態度を抑制して、われわれの理解を越えている神を己れの感覚の下に従わせ、あるいは何らかの姿のもとに表現することをあえてするのを許さないためのものである。第二は、どのような像をも、宗教的理由によって、われわれがあがめることを禁じるものである。（II, vii, 17）

(23) 聖書においてわれわれに差し出されている神についての知識は、被造物刻みつけられて輝いているそれと、別の目的をさし示すものではない。すなわち、第一に、神への恐れ、第二に、神への信頼へとわれわれを招くのである。これは、もちろん、生活の全き純潔といつわりなき従順とをもって神を礼拝することを学ぶためであり、その上さらに、かれのいつくしみに全幅的に依存するにいたるためである。（I, xi, 2）

(24) クーパー、前掲書、二三三頁。このクーパーの言及は、以下のカルヴァンの言葉によって例証される。
パウロが「神の形」の回復について論じるとき、かれの言葉から、次のことを取り出すのは容易である。すなわち、それは、人がその始原において神と同じ形にかなたどられたのは、本来の「流し込み」によってではなく、御霊の恵みと力によってである、ということである。パウロは「われわれは、キリストの栄光を見つつ、主の御霊によってのことく、主の形に変えられる」という（イコリ三：一八）。この御霊は、われわれのうちで、たしかに、われわれを神と同一本質にするようには働きたまわないのである。（I, xv, 5）
ウゴルニックは、カルヴァンの聖書を読むことへの強調は、彼がアウグスチヌスより始まった西方教会の伝統の中にあることを示している指摘する。

(25) 聖アウグスチヌスの経験は西方の範例を劇的に例証している。彼が「取りて読め。」という言葉聞きそれを実践したときに、彼は西方の認識モデルを創造したのである。すなわち読者がテキストに接し、自らその意味を見いだすという原則である。（ウゴルニック、前掲書、二四頁）
以下の箇所がカルヴァンの聖書信仰を例証している。

(26) わたしは、キリストを仲保者として立てるところの、信仰と悔い改めとの教理のほかに、聖書が、この世界を創造し、支配したもう

唯一の真実の神を、たしかな目にするしとしるしづけけによつてはめたたえ、いつわりの神々の群れと混同されることがないようにしている、ということをもたくりかえして、くれぐれも言っておく。(I, vi, 2)

聖書の弟子になるのでなければ、誰ひとりとして聖なる教理をわずかに味わう(二)もできない。(I, vi, 2)

わたしは言う。「御言葉にこそおもむかなければならぬ」。(I, vi, 3)

カルヴァンは、人間を動物と異なるものとするのは理性であると考えた。

全人類を観察するならば、われわれの固有の本性は「理性」にある。これがわれわれのとも區別する。(II, iii, 17)

彼のこの言及は、彼の人間の中における「神の形」理解に基づいている。彼は理性こそがその「神の形」であると考えた。(I, xv, 3) もちろん聖書を強調するからといって、信仰においては知的な面がすべてであるとかルヴァンが考えていたと筆者が言おうとしているのではない。人間は感情の動物であるときえ言われるほどであるから、感情的なものを無視して信仰を語ることはできない。それゆえ、現代の福音派教会を見ても、感性に訴えるため証しや体験談が語られたりする。しかし、最終的には聖書から正当に「この正当性の目安となるのが正しい釈義と神学であるが」導き出された真理に人を向かわしめるということが意図されており、論理性や情緒性を用いて会衆を「説得し納得させる」傾向が顕著となるという意味で、「知的」なのである。

ここに、純粹にして現実性をもった「宗教」がある。それはすなわち、神へのおごそかな恐れと結びついた信仰である。それは恐れが自発的なうやうやしさをうちを含むとともに、法律で規定されているような正しい礼拝をともなう。(I, iii, 2)

同書、一三頁、注九。

(31) シンボルについて考える場合、イエスによって残されたシンボル (dominical symbol) と教会がその歴史の中で形成したシンボル (ecclesiastical symbol) とを區別しておくことが大切であろう。イエスによるものは、(二)に記したものであるが、教会によって形成されたものにはさらに二種類あり、普遍的に世界中の教会で受け入れられているシンボル(聖書、説教台、聖餐卓、洗礼槽あるいは洗礼盤、そして十字架)と、各教会がおかれている国や地域の文化が反映されているシンボル(イコンの用い方、ガウンの色や形、ろうそくの色や形、十字をきるしぐさ、ひざまづき方、おじぎの仕方などのジェスチャーの形式など)とがある。

(32) 例えば幕屋を造るにしても、造る者の心の姿勢(「主が知恵を授けられた、心に知恵のある者すべて、すなわち感動して、進み出てその仕事をしたいと思う者」)が大切なものとして位置づけられている(出エ二六：二)。イザヤの言葉にも神の基準が見られる(イザヤ一：一一一七)。

(33) マルコ七：九・一二のコルバンの記事やサマリヤの女との会話における礼拝の在り方の指摘(ヨハ四：二〇・二四)にそれが見られる。

(34) イエスの公同礼拝に対する姿勢は、以下の点に要約できよう。①イエスは旧約の礼拝を支持された。聖書にはイエスがいけにえをきざげたという記録やいけにえの儀式そのものの継続を指示した記事は存在しない。しかし、少なくともイエスは神殿に詣で(ルカ二：二二・二五)、ヨハ七：一四・四九、一〇：二二・二三)、「祈りの家」としてのそれを尊ばれた(ルカ一九：四五・四八)。さらに主は会堂礼拝に定期的に出席され(ルカ四：一六)、イスラエルの祭をも守られた(ヨハ七：二二、一〇・二二)。そして、言うまでもなく最後の晩餐を含む最後の二週間の過ごされ方は、イエスがイスラエル最大の祭に対して深い知識を持ち、それを尊重していたことを十分に語るものである(マタ二六：一一・二〇、マコ一四：一一・二六、ルカ二二：一一・二三、ヨハ二二：一七・二〇)。②イエスは旧約の儀式を「自分を指し示す型である」とされた。イエスは神殿・会堂礼拝や種々の祭がもはや不必要だと宣言はされなかったが、これらのものの存在意義が「自分を指し示すこと」にあったことを語っている(ルカ四：一六・二〇、二四・二五・二七、四四・四七)。③イエスは旧約の習慣に新しい意味を与える権威をもつておられることを示された。安息日の主に関する論争(マコ二二：二七・二八)、汚れとさよきについての論争(マコ七：一・二三)、「祈りと断食についての論争(マタ六：五・八、一六・一八)などにおいて、それが明らかである。要するにイエスは「form」の存在が無意味であるとしたのではなく、form 自体の持つ意味や form の様相はイエスが自身の主権性を軸として変化しうるものであることを我々に示したのである。

(35) 今日、アメリカにおいては、典礼教会からペンテコステ教会にいたるまで、礼拝形式を相互に学び合おうという傾向が顕著となってきた。それぞれの教派間で他の伝統をどのように採り入れ始めてくるかについて、Robert Webber, *Signs of Wonder: The Phenomenon of Convergence in Modern Liturgical and Charismatic Churches*, Nashville, Abbott Martyn, 1992, p.43-56 で紹介されている。また「礼拝における変化のタイプ」などの問題が生じているかについて、Mary Collins, *Worship Renewal to Practice*, Washington, D.C., The Pastoral Press, 1987 や「典礼教会の伝統がペンテコステ教会にどのように採り入れられているかについて」、Jack W. Hayford, *Worship His Majesty*, Dallas, Word, 1987 を参照された。

(36) 「受肉」とは聖書用語ではないが、その意味する概念は聖書的なものである。すなわちヨハネ一：一四に記されているように、神性と人間性という論理的には相互に背反する二つのものの同居を意味するこの真理に対する態度は、ヨハネ四：二二によれば「真理の霊と偽りの霊」とを判別する基準ともなる重要なものである。クノース主義や仮現説に見られるように、神性と人間性の同居という事柄を否定的に理解する立場と異なり、キリスト教は神がこの物的世を救い聖めるために自ら形ある姿をとられたのだと、肯定的に

- 理解する。すなわちヨハネ三：一六が示す通り、キリスト教受肉神学は、神の愛に基礎を置くのである。聖書自身この受肉は奥義 (mystery) であるという語の通り (コロシ：一二) の真理は論理的に説明するものが困難である。
- (37) 礼拝をめぐってに定着するかは、様々な立場がある。たとえば James F. White, *Introduction to Christian Worship*. Abingdon, 1980, p.25・30 によればまとめられている。
- (38) 三菱自動車工業株式会社編『日本にうつる』三省堂、一九八七年、一〇五頁。
- (39) Robert Webber, *Liturgical Evangelism*, Harrisburg, Morehouse Publishing, 1986, p.20
- (40) Joseph Jennes, *A History of the Catholic Church in Japan*, Tokyo, Oriens Institute for Religious Research, 1973, p.202-206